

品川学藝高等学校 パフォーミングアーティストコース・ミュージカル専攻
令和六年度入学試験 実技試験課題（演技）

※課題①②よりどちらかを選択して演じてください。

① 野田秀樹作『キル』より 第一場 ※イマダの台詞は審査員が喋ります。

舞台は（架空の）太古のモンゴル。数多のデザイナーたちが武力
抗争を繰り広げていた。ひとりのデザイナー・テムジンが現れ、
自らの生い立ちを語り始める。

テムジン ミシンが夢を見た。大草原の夢を縫っていた。ミシンが足を踏むたびに
草原は広がっていった。ポビンケースから紡ぎ出される野心の糸が、モ
ンゴルの野を駆けめぐり、蒼き狼を縫いつけて、吠えかかる日をミシン
は夢見た。足踏みと草原を繋ぐ宿命のベルトが外れない限り、一台のミ
シンは、世界を手に入れるはずだった。ミシンが夢を見た日、その男は
産声をあげた。

少年・テムジンは、父親のイマダから先祖の物語を聞く。

イマダ やい、テムジン！うちをただの洋服屋だと思ってくれるなよ。蒼き狼の
血を引いた洋服屋だ。

テムジン 蒼き狼？！

イマダ それは、お前が生まれる遠い昔、世界中に流行したブランド名だ。それ
ばかりではないぞ。白い牝鹿の血も流れている。

テムジン 白い牝鹿？

イマダ 白い牝鹿は世界中を席卷した幻のファッションモデルだ。

テムジン 蒼き縦糸が白い横糸を、ミシンのリズムで紡いでいくんだね。

イマダ 天才デザイナーの蒼き狼と幻のモデルの白い牝鹿は天からやってきた。

二人は慌ただしいファッションショーの楽屋で、あつという間に結ばれ、
子をつくった。それがこの洋服屋の祖先だ。

テムジン それが親父からもらった、たったひとつの話だった。俺の大好きな話、
草原を駆ける狼。俺にはそれ以外の言葉は要らない。俺には蒼き狼の血
が流れているんだ。

②

〔野田秀樹作『キル』より第十場〕 ※結髪の台詞は審査員が喋ります。

ブランド『蒼き狼』を掲げる若きデザイナー・テムジンは、ライバルのヒツジ・デールカルダンを滅ぼし、美しいモデルのシルクを捕虜として手に入れる。テムジンはシルクを気に入るが、気の強いシルクはテムジンになびかない。テムジンは、部下の結髪（けっぱつ）に手紙を書かせ、シルクの下へ送る。シルクは結髪から手紙を受け取り、読み始める。最初は興味無さげだが、だんだんと手紙に引き込まれていく。

シルク

今日も初めて見た日の笑顔でお暮らしですか。僕は、長い間、このモンゴルの草原の転校生でした。転校生には、いつも初めての日があります。初めての学校の初めての校舎で、初めての教室へ行くまでのあの長い廊下、その廊下だけは、どこへ行っても同じくらい長いのです。校庭に弾む声を耳にすると逃げ出したくなります。やがて教室の引き戸を開け、自己紹介をします。僕の顔は凍りついたままです。迎えてくれる仲間は、珍しい動物でも見るように僕を見ます。転校をしてばかりいると、人を好きになることに臆病になります。別れが来るのを知っているから。けれども、初めて見た笑顔を愛してしまうことがあります。やがて別れが来ることを忘れて好きになってしまうことがあります。あの春の日の教室で、あなたを見た僕がそうでした。あれから、このひとりの洋服屋は、月が出るとモンゴルの草原で銀色の夜を縫っています。夜が銀色に見えるたら、それは初めて僕があなたに贈る指輪です。……これ、テムジンがあたしにとって？

はい。

結髪

あの人、見た感じは、とてもこんなもの書けそうもないのに。

結髪

気に入っていただけました？

シルク

好きになったわ。

結髪

あの方を？

シルク

見た目のあの人は今でも嫌い。でもここにとどまるこの手紙が好き。この手紙を書いたあの人が好き。

結髪

複雑な心境です。